

日本語読書大衆に向きあつて 一九三〇年代後期「新鋭中篇創作集」の歴史的考察

陳淑容／訳・星名宏修

【概要】

一九三七年から四〇年の間、新聞の漢文欄廃止と純文学雑誌の停滞によって、この時期は往々にして台湾文学史における「空白」期と呼ばれている。本論は、複雑なこの時期の解釈を試みる。新聞の漢文欄廃止と純文学雑誌の停刊は、文学者たちに新聞の日本語芸欄の重要性に目を向けさせることになった。ここを舞台として、彼らは新たな天地を切り開いたのである。

本論は、黄得時が日刊『台湾新民報』学芸欄で打ち出した「新鋭中篇創作集」（一九三九年七月六日—一九四〇年五月一四日）を中心として、まず最初に歴史的に戦争期の新聞統制について検討する。次に時局の影響下で『新民報』学芸欄の編集長をつとめた黄得時の編集戦略と、彼の「新鋭中篇創作集」企画

について分析する。五人の作家を中心とする台湾人文学者たちは、通俗小説によっていかにして読者の共感を得ようとしたのだろうか。この共感が生まれる過程から、新聞雑誌の文芸政策や作家の主体性を読み取ることができる。日本語読者大衆に向きあうことは、一九三〇年代の末には避けられない時代的な課題となっていたのである。

本論文が指摘するように、日本語大衆読者をつなぐ「新鋭中篇創作集」は、一九二〇年代以来、白話文によって進められてきた台湾新文学や文化運動と背馳するものではない。むしろその物語言説によって早期の漢文読者と逆接的に結びつき、その読者を日本語読者群にまで広げたのである。それによって一九四〇年代における大衆メディア文化の高揚期を生み出す前哨部

隊となつたのだ。長らく文学史の「空白」期と考えられてきたこの時期は、新鋭中篇小説の誕生によって、植民地の台湾文学史上、まったく新しくラディカルな一ページとなつた。

一 「新鋭中篇創作集」の登場

一九三七年七月七日、中国と日本軍の北平郊外盧溝橋における衝突は、日中戦争の導火線となつた。遙か千里を隔てた、台湾とは関係がないように思えるこの衝突事件が、すぐさま島内の文壇に衝撃を与えただけでなく、既成の文壇のありかたを大きく変えることになる。一九三八年一月、黄得時、龍瑛宗、そして柳川浪花などの文学者は、「冬眠」「夜」「淋しき」などの言葉で事件後の台湾文学界を喩えている^①。後になって黄得時は、支那事変の勃発から一九四〇年一月一日に台湾文芸家協会が成立するまでのこの期間を、「僅かに台湾新民報紙上の新鋭中篇小説の企画以外に、文学活動もなければ、文芸雑誌もなかつた。この二年半は、云はゞ台湾文学運動の一つの空白的時代である」と述べている^②。

黄得時が「空白的時代」とまで結論づけたのは、「(一)支那事変といふ国家的大事件に直面して人々は心の余裕と落着きをなくしたこと。(二)従来インテリ・ルンペンと云はれた本島

人の作家が、軍属や通訳として大陸に出掛けたこと。(三)自由主義やプロ文学の洗礼を受けた作家達が思ふ存分に意見の発表ができなくなつたこと」などの理由による^③。こうした状況を転換させたのは、戦争の進展に従い人々が文学に従事する心を取り戻したこと、満洲と朝鮮文壇からの刺激があつたことを黄得時は挙げている。そして「一時萎縮してゐた文学的情熱が再び昂揚せられ」るキーポイントになつたのは、前述した『台湾新民報』（以下、『新民報』と略）の新鋭中篇小説特集なのである。

戦争は文壇の不振に直結した。しかし戦争前夜の漢文欄廃止と純文学雑誌の停頓などの現象も同時に考察するならば、より構造的にこの時期を考へることができらう。すなわち文学雑誌と文学活動の「空白的時代」に直面して、『台湾日日新報』『台湾新聞』『台湾日報』および『新民報』など四大日刊新聞は、危機をチャンスとし、日本語文芸欄という文学場の改編によって台湾文学の新しい契機を切り開くことを可能にしたのである。そして「新鋭中篇創作集」こそ、この再建過程のなかで最も重要で意義深い特集企画であつた。

一九三九年七月六日から一九四〇年五月一日日まで、翁鬧「港のある町」、王昶雄「淡水河の漣」、龍瑛宗「趙夫人の戯画」、呂赫若「季節図鑑」、そして張文環の「山茶花」からなる五本

の中篇小説を『新民報』は連続して掲載した。この全部で二四二回に及ぶ特集が「新鋭中篇創作集」である。間に約二ヶ月の空白期を除いて、一年の三分の二に近い期間、この小説特集が持続的に、しかも一気に日刊紙『新民報』に出現したのである⁵⁾。

特集が始まる前に学芸欄は次のような宣伝を行っていた。「執筆者は何れも、本島文芸界の第一線で活躍してゐるものばかりで、これ等のものが、顔を揃へて、各自その傑作を携へ、本紙に相前後して登場することは、本島文芸界未曾有の快挙であり、必ずや一時期を画するものと信じ、切に読者各位の御愛読をお願いする次第である」⁶⁾。広告で予定されていた陳華培の「胡蝶蘭」は掲載されなかったが、実際に執筆した五人はみな文名があり、なかでも龍瑛宗・呂赫若・張文環は中央文壇で評価されていたごく少数の台湾籍の作家であった。小説の刊行に先立ち、「作者の言葉」と写真を掲載するという定型のスタイルを取った。画家の挿絵も刊行予告にあわせて掲載された。これは日本内地での新聞小説の手法を移植したものであり、これ以前の『新民報』漢文通俗小説の売り出しかたを踏襲したものであった。作品の予告と生身の作者の声によって、読者の注目を引くことを狙ったのである⁶⁾。

よく知られているように、読者は新聞を購読する主な消費集団であり、その数の多寡は新聞社の経営に直結するため、近代資本主義が主導する大衆メディアのネットワークのなかでとりわけ重視される。不特定の大衆読者層を獲得するために、作者と画家そして編集者は、短時間で原稿と挿絵と編集作業をやっのけなければならぬ。これは時間との競争であり、互いの暗黙の了解とチームワークが試される。しかもその伝達形式は、従来の文学雑誌によって形成された主流のものとは大きく異なっている。未知の大衆読者層をテキストの消費市場に組み込みつつ、彼らのことを慎重に検討するなどということは、これまでの経験を超えたものだった。

「本島文芸界の第一線で活躍してゐる」文学者を結集したこの特集は、新聞小説の連載によって物語を伝達しようとした。全面的に日本語が漢文に取って代わろうとする時に、編者と作家は従来とは異なる言説戦略を採用したのである。すなわち「純文学」「エリート文学」を脱却し、「閉鎖的」で「特定」の読者層しか有していない同人雑誌型の伝達モデルに対して、「通俗文学」「庶民大衆」といった「開かれた」「不特定」の読者を対象とする新聞紙型のモデルを試みよう訴えかけたのである。そして当時の新聞文芸欄を支配していた新詩、隨筆と評論などの主要なジャンルを、「中篇小説」によって代え、さらに現地

作家の創作であることを強調することで、同盟通信社が提供する既成の原稿に取って代えようとしたのである。編集者黃得時の苦心が伺えるところである。

現地化された文芸生産のスタイルにより、この創作集が目目されたのは間違いない。日刊新聞に連載された物語によって、雅俗共に楽しめる想像の空間を作り上げ、読者の日常生活世界に入り込むことが可能になった。この文芸生産のネットワークが切り開いた新しい可能性は、事後後低迷していた台湾文学に活気を与え、戦争の後に低調に沈んでいた台湾文壇に波風を巻き起こした。ここから一九四〇年代の台湾文学運動のもう一つの高峰期を迎えることになるのである。

二 同盟通信社

——戦時期の国策宣伝とニュース生産の機構

「新鋭中篇創作集」が一九三九年七月に登場したのは、歴史的かつ政治的な背景があった。盧溝橋事件の後、戦争の影は台湾文学の活動を停滞させた⁷⁷。新聞の文芸欄の編集者は日に日に悪化する時局に向き合わねばならないだけでなく、「同盟通信社」から送られてくるニュースが、それ以前の文芸生産のメカニズムを抑制したのである。そのうえ一九三七年四月以後、四

大新聞社が共同で宣言した漢文欄廃止の緊縮措置は、もともと脆弱な状態にあった台湾文学と文化環境に未曾有の挑戦を余儀なくさせた。

一九三六年一月に成立した「同盟通信社」（「同盟」と略称）は、国家の主導により「新聞聯合社」と「日本電報通信社」の二大通信社を統合した組織であり、当初からニュースの「発信」と「受信」を目的としていた。一九三七年の盧溝橋事件の勃発とその後の戦時体制に従って、「対外宣伝」「対敵情報傍受」「占領地での現地軍への協力」などの三点を主要な業務とした。この後、戦況の発展に従って急速に拡張した同盟は、社長古野伊之助が「報道報国」「正確迅速」「大同結盟」の三原則を打ち出し、社員に「国策遂行に邁進」するよう指示した。事変前夜から一九四五年一〇月にかけて、日本帝国の敗戦によって解体されるまでの約九年の間、「同盟」のあらゆる任務は戦争と密接に関連していたのである。そのため「戦時期に、帝国のプロパガンダ活動を担った国策通信社」という評価は、衆目的一致するところとなった⁷⁸。

国策の必要に基づいて設立された「同盟」は、帝国の新聞統制に非常に大きな力を与えた。その統一された原稿配給は、各大新聞社にとっても一定のコスト削減につながった。しかしニュースが当局の言論で埋め尽くされるといふ事態は、新聞が正

義のために声を挙げ、真理のために批判を行うという理想がに失われてしまったことを意味するだろう。それと同時に社会全体の反省と進歩も制約されてしまう。「同盟」主導下でのニュースの統一は、地方紙の異質性を縮小し、生存空間を圧迫した。それに伴って地方小新聞社の経営と記者たちの生計が大きな影響を受けることになった。一九三六年以後、同盟通信社の成立に伴って、地方新聞社の倒産と大量の記者の失業という現象が、幅広く見られるようになる。

文芸方面では、感情交流と思想伝達に関わっている文学と芸術が、戦時体制下での国策協力のために、戦争動員のもとでの思想戦の重要な一環として組み込まれたのは当然だろう。「同盟」の文芸通信は、特別通信部（特信部）の下に置かれた。特信部は、時事問題の解説、特殊読み物、学芸、婦人家庭、科学、児童および漫画などを業務とした。これらの話題について、「同盟」はABC三つのページンを作成した。加盟した社員はそこから自由に選択し、組み合わせを変えることによって紙面の違いを打ち出すことができた。しかし同じ「同盟」を配給源とする原稿なので、全体的には大同小異の内容となってしまう¹⁰。

台湾では『台湾日日新報』をはじめとする五つの日刊新聞紙——『新民報』、『台湾新聞』、『台南新報』（後に『台湾日報』

と改称）、『東台湾新報』——が、同盟通信社が創設されたばかりの一九三六年の初めに社員となり、文芸欄でも同盟の原稿を大量に使用していた¹¹。事変の後には、戦争と文学に関する特集がしばしば掲載されるようになる。なかでも戦争と文学者、戦争と文壇、時局と新聞雑誌、従軍ペン部隊などは、よく見られたテーマであった。また戦時と密接に関わる大陸文学、農民文学、生産文学、航空文学、海洋文学などの記事が掲載されることもあった。それ以外にも大陸に進出するために「支那」文壇と作家の紹介が行われ、時局下の「国語」と「北京語」など、言語、文学、文化を中心とする特集が、同盟から次々に発信された。「同盟」経由の文芸ニュースが大量に伝えられるなかで、戦争文学と国民精神など話題が、徐々に読者の思惟に浸透していったのである。

こうした同盟が配給する原稿は、国策を宣揚することと不適切なニュースを抑制することの天秤のうえで、巧みにバランスをとっていた。戦争文学と国民精神を翼賛するだけでなく、その報道によって知らず知らずのうちに植民地の人々の考え方や日常生活を強力にコントロールすることになった。社会の木鐸としての新聞の理想は、こうして次第に失われていったのである。

三 「漢文欄廃止」と台湾新文学運動の挫折

「同盟」が強力に動きだしておよそ一年経った一九三七年四月、台湾の四大新聞は漢文欄を廃止するという声明を発表した。『台湾日日新報』、『台湾日報』、『台湾新聞』と『新民報』が共同で一九三七年三月一日に発表した声明は次のように述べている。「今回下名四新聞社は、時勢の進運に鑑むる所あり、漢文欄の廃止を申合せ夫々実行する事に致しました。領台既に四十年に及び、皇化恰ねく、文運頓に興りつつある当台湾としては、今日漢文欄を全廃するも何等の支障なき事を確信したが故であります」¹²⁾。

台湾領有の初期にあたる明治時代から、総督府が台湾人社会に政令を伝達するための政策的な要請と、絶対的多数の日本語が分からない台湾人をマーケットにするための経営的な観点から、いくつかの日本資本の新聞社は台湾人読者に向けた「漢文欄」を設けていた。一九二〇年代以後、日本留学生が東京で創刊した『台湾青年』は、台湾人が作り出すメディアが登場するきっかけとなった。刊行者の多くは、漢文／日本語の読み書きができるバイリンガルの知識人だったので、『台湾青年』は「漢文／日文並列」という方式を採用した。日本資本の新聞「漢文欄」が「御用性」と「営利性」を帯びていたのに対して、

『台湾青年』やその後継誌は、漢文が代表する「民族性」と「近代性」に重きを置いていた。彼らは台湾文化協会と呼応し、言論による発言と文芸論述によって、一九二〇年代の台湾における政治、社会と文化運動の重要な勢力となったのである¹³⁾。

『台湾青年』は『台湾』、『台湾民報』、『台湾新民報』と何度も改題した。また発行形態も月刊から、半月刊、旬刊、週刊となり、一二年の絶えざる総督府体制との衝突と協調を経て、ようやく一九三二年四月一日に日刊紙『台湾新民報』の発行にたどりついた¹⁴⁾。つとに「台湾人の唯一の言論機関」と称されていた「台湾民報」系統の漢文欄は、議論の媒体であると同時に創作発表の重要な舞台を提供した。いくつもの重要な文学論争、例えば一九二〇年代半ばの新旧文学論争や一九三〇年代初期の郷土文学論争は、いずれも漢文欄という文学場によって、理論闘争と創作実践を推し進めたのである。

表面的に見れば、漢文欄の廃止は四大新聞社の自由意思による共通見解というかたちをとっている。しかし一九三七年一月一日に発せられた府令「公学校の漢文欄廃止」など一連の出来事から、総督府と新聞社の幹部の協議にもとづく行動が、こうした事態に至る上で重要な役割を果たしていたと、中島利郎は注意をうながしている。

河原功はさらに一歩進めて、日刊紙の漢文欄廃止は、一九三

六年七月二五日に開催された「民風作興協議会」で決定されていたが、総督府側が「新聞の漢文欄廃止については法律的手段によらずに実現」するよう強調したと指摘している。そのため我々に残されているのは四大日刊紙の共同社告であり、総督府が法律や律令によって推進したことにはなっていない。したがって表むきは「自主的に廃止」という結果になっているのである¹⁵⁾。

漢文欄の廃止について、台湾総督の小林躋造は以下のように宣言していた。「今回本島に於る有力なる新聞紙が申合せをして従来その紙面の四分の一乃至二分の一占めてゐた漢文欄もつと適切に云へば台湾語欄を廢止し内地の言語文章を以てする記事を拡張されることになつたのは（中略）それ故に歴代当局は常に国語の普及に努めて皇国精神の徹底に資し來つたのであるが新聞等では現実の読者の便宜上台湾語台湾文を全廢するまでには至らなかつた然し早晚廢止されぬばならぬことは誰しも異存なかりし所で謂はば時機の問題であつたのである」¹⁶⁾。小林は「漢文欄」を「台湾語」「台湾文」と同じものと見なしている。彼が定義する「漢文欄」とは「国語」と対立し、「皇国精神」発揚の妨げになるものであった。

一九三一年九月に滿州事変が勃発した後、軍部の力が強まるにつれ、「非常時」という名目で戦時体制を打ち立てようとする

動きが強まった。反戦を掲げる文化・文学運動が弾圧される時代の始まりである。小林総督によって、「台湾語／文」と等号で結ばれた「漢文」欄の存在は、皇国精神の推進に妨げとなるだけでなく、内地の言語が全面的に台湾人の生活と思维空間に入り込む可能性を切断するものでもあった。そのため総督府の危惧を招き、廢止されることになったのである¹⁷⁾。新聞の漢文欄廢止は、もともとかなりの数で存在していた漢文によるエクリチュールとその読者にとって、そこを舞台とした交流と對話が中断に追い込まれることを意味していた。その衝撃を最も早く受けた文芸欄で活躍していた漢文作家たちは断筆に追い込まれてしまう。『台湾青年』の創刊から二〇年にわたって引きつけられてきた漢文読者たちも、新たな文芸読書のモデルを構築しなければならなくなった。詩人であり歴史家でもある楊雲萍が一九四〇年に有名な『台湾小説選』に書いた序文は、漢文欄の廢止が台湾新文学運動に対して「大きな一段落を迎え」させたことを指摘している。

ここにいたって、我々の台湾新文学運動は、ようやくわずかばかりの成果を上げ、小さな一段落を告げた。（中略）昭和二年六月に、いわゆる各新聞の「漢文欄」の廢止により、はじめて嚴肅にも大きな一段落を迎えたのである¹⁸⁾。

ところで新聞の現場で実際に漢文芸欄で活躍していた編集者や作家たちは、この重大な政策をどのように見ていたのだろうか。彼らはどういったやり方で、これに対応したのだろうか。これらの問いこそ、我々にとってより重要なものである。

四 和文の中心にむかって

——編集者黃得時の攻守戦略

すでに述べたように、「台湾人の唯一の言論機関」と称されていた『新民報』にとって、一九三七年は間違いなく困難な時期であった。外には同盟通信社の積極的な活動があった。『新民報』は同盟が取捨選択したニュースを受け取り、文芸欄の紙面に大量の同盟の原稿によって占められていたため、当然ながらさまざまな批判を受けることになった。

これとは別に、漢文欄の廃止と日文欄の興隆が、当事者にとってより重大な試練となった。このような局面に対して、新民報社は学芸欄の編集者を交代させることで対応しようとした。台北帝国大学文政学部を卒業したばかりの黃得時が、一九三七年四月から六月の間に、徐坤泉から学芸欄の編集を引き継ぐことになったのである¹⁹⁾。

一九三七年の『新民報』を見ることができないなか、作家の呉漫沙が「最後の二頁」と名づけた新聞切抜き帳は、漢文欄廃止に関する貴重な証拠を残している。「最後の二頁」と名づけることで、夭折した新民報漢文学芸欄を記念しようとした²⁰⁾と呉は記している。学芸欄の前編集者であった老徐（徐坤泉）は、「最後の授業」と題する一文で自らを庭師になぞらえ、「庭師に才なく、地主に能なく」、南国の園地を他人の手に売り渡さなければならなくなったことを嘆いた。彼の後継者である黃得時は、「最後の一句」において昔を偲びつつ、『新民報』漢文学芸欄が台湾文学史で果たした役割を高く評価した。しかし黄は次のように強調することも忘れなかったのである。

本学芸面が閉じられた後、和文の学芸面が紙面を増やして登場するという。それなら我らは作者としてもまたは読者としても、これまで漢文を大切にしてきたように和文も大切にしなければならぬ。なぜならこれからの台湾は、あらゆる日常生活が和文を中心としなければならぬからだ。これは時勢がしからしめるところで、人の力で押しとどめることはできない。

呉漫沙や徐坤泉が『新民報』漢文欄の栄光に浸り、その夭折

を嘆いているのと比べると、台北帝国大学文政学部東洋文学科を卒業したばかりの、日本と中国の文学を専攻した黄得時（一九〇九—一九九九）は、「最後の一句」で漢文欄の消滅を悲しんだものの、将来は「和文」が中心となるという見方を示している。

「漢文」の終わりを「和文」のスタートと見なした黄得時は、積極的な態度でこの台湾の文化政治の重要な転換点を正面から迎え撃とうとした。もちろんこれは、彼が徐坤泉の後継者として『新民報』学芸欄の編集を担当することになった役割とも関係がある。しかし両者の異なった教養背景こそ、ふたりが異なった思考パターンを持つに至った主な理由であった。

呉漫沙（一九二二—二〇〇五）は福建省晋江の出身。一九三五年に華僑の身分で台湾に定住した。徐坤泉（一九〇七—一九五四）の本籍は澎湖。幼児期に高雄旗後に移り、幼い頃から漢文を学ぶ。後に廈門の英華書院と香港拔萃書院で学んだ。ふたりはともに漢文通俗小説の重要な書き手でもあった。一九三二年に『新民報』が日刊化された後、徐坤泉は学芸欄の編集を担当することになる。彼の何本かの連載小説は、台湾文学史上「ベストセラー」と「ロングセラー」の記録を打ち立てた。最も有名なのは「阿Q之弟」というペンネームで創作した『可愛の仇人』である。そして呉漫沙は、徐坤泉の紹介によってこの

隊列に加わった。

これらの通俗的な漢文大衆小説は、日刊化以後の新聞が読者の問題に直面しなければならなかったことで生まれた。しかし度を超した資本主義化のために、徐坤泉は編集者在職時に批判を受けることになった。その任から離れる直前に、台湾新文学社が主催した座談会で、『新民報』学芸欄編集長の徐坤泉に対して、郭秋生は次のような問いかけを行っている。

現在、新民報の学芸面はあなたが編集しているわけだが、これに満足しているのか？ 何か新しい方策はないのか？ 今のように広告欄の余白でしかないのなら、あまりにも哀れではないだろうか？

郭秋生の問いは、『新民報』学芸欄を運営していくことの難しさを突いたものであるが、徐坤泉は「満足していない」と答え、編集者としての無力さを顕わにしまった。こうしたことも彼を交代させる内々の要因となったのだろう。

任務を引き継いだ黄得時は名門の出身で、父親の黄純青は著名な漢詩人であるだけでなく、実業家・総督府評議員などいくつもの肩書きを備えていた。彼の家庭と受けた教育は、日本語に対して単に批判や拒絶の段階に留まらず、むしろ一歩進ん

で「日常生活は和文を中心としなければならない」という現実的な主張を提起させることになった。

固有の「漢文」の境界線は、きつと打ち破られると黄得時は認識していた。もっと多くの読者大衆を吸収できる新たな舞台を彼は構築しなければならなかった。そしてその舞台とは、近い将来においては日本語だったのである。こうした認識は政治上の現実を反映していた。小林総督が述べていたように、台湾統治は四〇年に及び、皇化が普及し、基礎教育が大規模に推進されているという前提のもと、日本語はすでに異民族の言語ではなく、日本語読書も少数の知識階級の特権ではなくなっていた。日本語で日常生活を行うことも可能となっており、日本語は漢文に代わり、次の段階で台湾人が物語を伝達する主要な工具となっていたのである。

こうした認識は、黄得時が『新民報』の学芸欄の日文編集を引き継ぐ際に、重要な意味を持っていたことは間違いない。しかし前述したように、メディア統制に対する帝国の二重の圧力——積極的には同盟通信社によるニュースの「発送」、消極的には漢文欄「廃止」の協議——は、編集者となったばかりの黄得時が力を発揮しようにも、強い足かせとなった。そのため彼は、『新民報』学芸欄で大量の同盟の記事を使用したのである。こうした安直な守りの姿勢は、彼に臨機応変に対応できる貴重

なチャンスを与え、漢文作家が筆を置いた空白期を埋めることを可能にしたものの、多くの否定的な評価を引き寄せることにもなった。

柳川浪花の『新民報』に対する批判は典型的なものである。

「淋しき昭和十二年の本島文芸界」のなかで、柳川は次のように指摘している。「茲でもつとも吾人を失望させたのは新民報の文芸面である、同報は常に本島人の指導機関として自他共に許してゐる新聞である、同報は文芸欄の新創と共に紙面を開放し大に本島人の文芸愛好家に活躍の舞台を與へるものであらうと思つたが六月以來、同紙上に掲載された本島内の作品は数へるしかなく殆んど内地の作品の雑文を以つてごまかして來た」²¹⁾。

柳川浪花のいう「内地の作品の雑文」とは、同盟通信社が供給する原稿を指す。この点に関して、黄得時は後になって以下のように回想している。

「同盟通信社」は、「学芸欄」が必要とする原稿も提供してくれた。これらの原稿は東京本社が編集したものだ。内容は文芸評論、散文、詩、書評などで、執筆者はいずれも日本文壇の一流の作家だった。こうした原稿を掲載することで新聞の魅力を増し、新聞自体の価値を高めることができた。しか

しその内容は日本本土のことで台湾とはそれほど関係がない。読んでみると隔靴搔痒の感は免れず、切実な感じがしないのだ。ましてやそれらの原稿は、ひとつの新聞社にだけ提供されていたのではなく、同盟通信社と契約をしている新聞社はどこでも入手できたのだから。だからお互いに同じような内容で、千篇一律。読者の興味を引きようがなかった。しかし本地の原稿が不足している時は、できあいの同盟の原稿を使って紙面を埋め、適当にやりすこすのには便利なものだった。

同盟の原稿が便利だったことを、黄得時は否定していない。日本語の原稿が一時的に欠乏していた台湾では、著名作家の原稿によって適宜紙面を埋めるだけでなく、学芸欄の魅力を高めることにも繋がっていた。しかし同盟の原稿は、あまりにも非営利性と同一性を追求するものであったため、地方新聞に不可欠の独自性と時限性が失われがちであった。そのために読者の共感も限定的なものとなってしまったのである。

編集者としての黄得時は、計画的な編集手段を採用することにより、批判されていた新聞文芸の構造を変更する権限を持っていた。新しい文学の読者を獲得することで、編集者の信念と意識を伝えること。『新民報』学芸欄が、同盟の内地原稿で埋

められ批判の声が高まった時に、黄得時は編集者の権限により、一九三九年七月に「新鋭中篇創作集」を打ち出すことで、困難な状況を突破しようとしたのである。

五 日本語読書大衆に向きあって

——「新鋭中篇創作集」と

一九三〇年代後期の大衆文学動向

黄得時の企画で、翁鬧（一九一〇—一九四〇）、王昶雄（一九一五—一九〇〇）、龍瑛宗（一九一一—一九九）、呂赫若（一九一四—一九二一）、張文環（一九〇九—一九七八）の五人の作家が、あいっいで「新鋭中篇創作集」に登場した。日本の台湾統治から一五年ほどして生まれた彼らは、一九三九年に特集が始まった頃、最も年長だった編者の黄得時と張文環でさえ三〇歳で、それ以外はみな二〇歳そこそこの若者だった。完全に日本統治下で成長し教育を受けた彼ら新しい世代は、新たに学習した植民者の言語を近代文明を吸収する主なツールとすることが運命づけられていた。それは彼らの前の世代の漢文作家とは異なる文学の道歩むことを意味していた。日常生活と思维にまで浸透した日本語使用は、彼らの明確な標識となった。彼らは植民者の言語に熟練することによって、中央文壇で頭角を現すことも可能

になった。張文環、呂赫若、龍瑛宗らがそうである。

彼らが共通して向きあっていたのが、徐々に形をなしつつあった日本語読者群である。藤井省三の統計がしめすように、日本の台湾統治から四二年後の一九三七年には、台湾人の日本語理解者は三七・八%、一九四〇年と四一年はそれぞれ五七%と五七%である。その比率を成人の数に換算すると、それぞれ一九〇万、二八〇万、三二〇万人となる。一九三七年以後に急速に進展した数字は、新聞の漢文欄廃止後の皇民化運動と関係するのはもちろんである。これと対応して、伝統的な書房と漢文読者の数は、ますます数を減らしていった²³。

日本語理解者が二〇〇万人を突破し、台湾の人口の半数を超えた一九四〇年の前夜に、彼ら新鋭作家の作品が、三万三千部を超える発行部数をほこる『新民報』学芸欄に掲載された。個人の購読者、公共図書館、公私立の団体や書店での流通を通じて、作品の読者数は三万人にとどまらなかっただろう。日刊紙の生産、複製、消費と流通を通して、これらの物語は伝達されていったのである。

五部の日本語中篇小说を一つの特集とし、連載方式で掲載するのは、台湾では初めての試みである。これより前に『台湾日日新報』と『新民報』は、それぞれ「はがき随筆」（一九三九・二・二一―一九・二、およそ一四〇本あまり）と「郷土随筆

集」（一九三九・三・二一―七・一、全二二本）を掲載していた。

随筆が個人的な抒情性を強調するのに対して、小説の叙事性は人物の描写とプロットの構成に作者の力を傾注させる。また短篇に比べて中篇小说は、作家自身のバックグラウンドを超えて叙事の軸を広げさせ、多角的な物語形式に向かわせる。すなわち自我から他者に至るエクリチュールの過程なのだ。このように他者を書くこととその発見は、作者に自我のバックグラウンドとそれとづく制約から超越させ、全く新しい未知の読者大衆に向きあわせることになる。

これらの読者は、それ以前の知識人を中心とした同人雑誌の特定の読者とは異なる。また伝統的な文人を中心とした早期の漢文通俗小説の読者とも異なっている。彼らは日本語の基礎教育を受けた若い世代であり、形ははっきりしていないが最も敏感な購買量を左右するだけの数を有している。こうして新鋭中篇は「現在進行形」の大衆読者を受容した、多声的で多様な展開を可能とする開かれた物語となったのである。

これらの物語は精彩のある挿絵とセットとなっていて、プロの画家の挿絵は、毎日の「創作集」に面白みと風情を増す効果を発揮した。絵画による叙事と小説テキストが結びついた「画文共鳴」によって、文学は近寄りたがたいものではなくなった。

また大衆の新聞文芸消費モデルへの適応は、純文学作家を大衆読者に接近させることになった²⁴⁾。

翁開は「港のある町」で、遙か神戸で起こった物語——港の孤児と不良少年・少女の運命の交響曲——を語る。王昶雄の「淡水河の漣」は、淡水河のほとりに住む一家の恩讐に満ちた歴史を題材としている。故郷の伝奇的なナラティブは、最初から最後まで濃厚な悲劇的陰影に覆われている。メタ手法で創作された龍瑛宗の「趙夫人の戯画」は、作者は新しい創作形式を通じて写実主義の伝統を脱構築し、通俗な題材に新たな生命を吹き込んだ。大衆読者を想定して構想された「季節図鑑」は内台恋愛をテーマとし、呂赫若は通俗的な手法で、二元的な対立と故意に単純化された人物形象を作り出した。そうすることで大衆の好みに適合した登場人物と、大げさなストーリーを創造したのである。一〇一回という長期にわたった「山茶花」は、植民地下における啓蒙、成長とアイデンティティをめぐる青年たちの歌を展開した。四ヶ月に及ぶ連載の過程で、作者の張文環は大いに人気を博した²⁵⁾。

これらのテクストには特定の時代背景がないかのように見える。しかし難解な叙事の手法は、はからずも物語を戦争へと導いていくのだ。時代の脈絡から離れたように見える「港のある町」は、主人公が神戸や香港、大連など、日本帝国の「南進」

「北進」の重要な港湾都市に出入りすることで、戦争の気配が真に迫って伝わってくる。「淡水河の漣」は主人公の阿川が大陸に行き、軍夫を志願するところで結ばれるが、この唐突な結論はやはり時局を連想させる。「趙夫人の戯画」の結末部分は、主人公の彭章郎と冬蘭を心身ともに落ち着かせる場所として「南方」を創造するのである。「南方」は孤児である彭章郎と冬蘭の逃亡先であると同時に希望の所在でもある。そして戦時期においては、さまざまなイメージが充満した空間であった。「季節図鑑」は戦時体制下で重要な国策となった「内台通婚」を連想させずにはおかない。物語を語ることに長けた張文環は、小説「山茶花」で、軍歌「戦友」——「ここは御国を何百里離れて遠き満州の」——に託して戦争という悲運のやるせなさを表現したが、この歌は太平洋戦争の時期になると禁止されることになった。

主題を設定せず、作者の自由に任せた五篇の中篇創作は、ぼんやりとしているながら手に触れることができるような戦争の背景を、不思議な形で描き出している。当局の戦争翼賛の作品と比べて、「戦争」を背景化したこれらの作品には、台湾人の集団としての憂慮や焦り、そして彼らが置かれた境遇が共通して描かれている。台湾人作家の欲望と困難を体現すると同時に、読者の想像も作品中に投影している。戦争は背景化することに

よって、孤児・愛情・成長と家庭などの叙事を取り囲んでいるのだ。そのため明確な形をとらない順応の道となっており、台湾人に共通する感情と意思を表現することによって、「私たち」の時代の声を伝えたのである。

結論

本論は、文学雑誌も文学活動も存在しない台湾文学史上の「空白的時代」と黄得時に喩えられた一九三七年から四〇年の期間を歴史的に考察したものである。一九三七年前後、同盟通信社の組織的發展と新聞漢文欄の廃止が、活気を呈していた台湾文学を未曾有の厳しい試練に直面させたこと、しかしこの危機から転機を生み出したことを指摘した。新聞の編集者は芸芸欄を意識的に活用するようになり、話題の提供と特集企画によって、新たな文学のチャンスを開いたのである。黄得時が主導した『新民報』の新鋭中篇創作集こそ、その代表的なものであった。

この特集が掲載された後、企画者と作家はみな高く評価した。一九四〇年の元旦に『新民報』学芸欄が掲載した三篇の随筆は、どれもこの特集の重要性を評価している。その三篇とは、黄得時「台湾文壇の建設」、張文環「独特なものの存在——今年は

大いにやらう」そして龍瑛宗「ひとつの回憶——文運ふたゝび動く」である。

龍瑛宗は「ひとつの回憶——文運ふたゝび動く」で、次のように述べている。

次に特筆すべき「中篇創作集」これは編輯者黄得時氏のプランとして最近にない有意義な催しであった。台湾の新進気鋭の作家を動員したこの企ては、ひとつのモメントとなつて、文運再び動くといふ気配を濃厚に示したからである。²⁶

新鋭中篇創作集が文学運動のまき直しに成功したのは、企画の新たな売り出し方だけでなく、従来とは異なる物語の語り方であった。それによって新たな日本語読者大衆の反響と共鳴を引き寄せたことこそ、さらに重要なポイントであった。本論文は「新鋭中篇創作集」を、台湾作家が純文学から通俗文学へと歩みだす試みととらえ、純文学作家が日本語読者大衆に向きあう典型例だと考えた。

この趨勢は、一九三〇年代末期の総督府による漢文の抑制によって促進された日本語読者大衆の發展と、切り離すことができないと筆者は考えている。本論文ではこれとは別の観点から漢文から日本語へと移りゆく過程を論じることによって、植民

地における漢文／日本語という対立関係のほかに、植民政策や少数の単一言語理解者の転換に伴って、それらの関係も緊張したり緩んだりしたと考えたのである。

台湾総督府の政治と教育措置により、単一の漢文／日本語理解者は少数となった。重なり合い、共存する二つの言語あるいは多言語の使用者が、徐々に植民地台湾の主流となったのである。一九三七年の後、この重層関係が断絶された後に、日本語作家はリレー方式で漢文作家の創作を引き継ぎ、「私たち」の時代の物語を書きついで。彼らはこのために「大衆読者」に対する定義と境界線を修正し、通俗的な物語を試みた。別の面

は、声を塞がれた漢文が一九三七年に次第に文化政治の舞台を失ってしまった後に、その膨大な読者も日本語の読書を通じて日常生活とその想像を完成させなければならなかった。このため作家と中篇小説が強く求められたのである。

本論文は、「新鋭中篇創作集」を、一九四〇年代の大衆メディア文化高揚期の前哨部隊を代表するものとして捉えた。この特集の検討によって、一九三〇年代末期の台湾日本語読書大衆が形成される状況を明らかにすることができたと思う。またさらに進んで、植民地期の台湾文学が内包するものと、その文化的意義の転化について理解することができたと考えている。

註

- (1) 柳川浪花「淋しき昭和十二年の本島文藝界」
『台湾公論』三卷一号、一九三八年一月。
中島利郎・河原功・下村作次郎編『日本統治
期台湾文学芸評論集(三)』(東京・緑蔭書
房、二〇〇一年)所収、一六四―一六五頁。
黄得時「冬眠を貪るな、台湾の作家達よ」
『台湾新民報』、一九三八年一月一日 一一
頁。龍瑛宗「文学の夜」(『台湾新民報』一九

- 三九年一月一日) 一三頁。
(2) 黄得時「晩近の台湾文学運動史」(『台湾文
学』二卷四号、一九四二年(〇月) 六頁。
(3) 前掲「晩近の台湾文学運動史」六一―七頁。
(4) 「新鋭中篇創作集」は、翁鬧作・榎本真砂夫
の絵「港のある町」(一九三九・七・六一
八・二〇、四六回)、王昶雄作・中村敬輝画
「淡水河の漣」(一九三九・八・二一―一九・二

- 二、三三回)、龍瑛宗作・陳春徳画「趙夫人
の戯画」(一九三九・九・二三―一〇・一五、
二二回)、呂赫若作・一本夏画「季節図鑑」
(一九三九・一〇・一六―一・一五、三〇
回)と張文環作・陳春徳画「山茶花」(一九
四〇・一・二三―一四、一一一回)など
五本の小説からなる。
またこの後「新民報」は引き続き、中山ち

- 「水鬼」(一九四〇・八・一—八・一〇)、
 一〇回、陳垂映「鳳凰花」(一九四〇・八・
 二四—九・六、一四回)、舟津敏之「梔子抄」
 (一九四〇・九・二—九・二三、一二回)
 からなる、よく似た形式の三本の作品を掲載
 した。しかし、刊行前の宣伝と「作者の言
 葉」など重要な部分は省かれた。筆者はこれ
 らの作品を「新鋭中篇集外集」と名づける。
 この特集に関して、博士論文「戦争前期台
 湾文学場域の形成と発展」(一九三七—四〇)
 (成功大学台湾文学系、二〇〇九年七月)、
 「開眼看世界——張文環(山茶花)の認同之
 旅」(柳書琴、張文環主編、『台灣現當代作家
 研究資料彙編・張文環』、國立台灣文學館、
 二〇一一年三月)、そして「雅俗之間——呂
 赫若小説「季節囚籠」試析」(王惠珍編、『戰
 鼓声中の歌者——龍瑛宗及其同時代東亞作家論
 文集』、清華大學台灣文學研究所、二〇一
 一年六月)などの論文で、初歩的な検討を行っ
 た。
- (5) この広告は一九三九年六月二十九日と七月二日
 に『台湾新民報』に掲載され、学芸欄の重要
 な位置を占めていた。
- (6) 陳偉智作、星名宏修訳「患ったのは時代の
 病——雞籠生とその周辺」は、『台湾新民
 報』の漢文通俗連載小説に挿絵を描いた鶏籠
 生の作品とその時代的な特徴について、詳細
 に考察している。また星名宏修の同論文への
 解説「読者大衆」とは誰のことか?も参
 考になる。松浦恆雄等編『越境するテキスト
- 東アジア文化・文学の新しい試み』所収
 (東京:研文出版、二〇〇八)一六二—二〇
 七頁。
- (7) この点に関しては柳書琴作、中島利郎訳「戦
 争と文壇——盧溝橋事変後の台湾文学活動の
 復興」が参考になる。下村作次郎他編『よみ
 がえる台湾文学——日本統治期の作家と作
 品』所収(東京:東方書店、一九九五年一〇
 月)。
- (8) 内川芳美の言葉。里見脩「同盟通信社の「戦
 時報道体制」——戦時期における通信系メデ
 ィアと国家」より引用。『帝国』日本の学知
 第四卷——メディアのなかの「帝国」収録
 (東京:岩波書店、二〇〇六年三月、一七二
 頁)。
- (9) 大村克人「新聞通信統制とその他」『新聞と
 社会』七巻七号、一九三六年七月、一四—
 一五頁。
- (10) 同盟通信社「同盟の組織と活動」(東京:同
 盟通信社、一九四一年七月)四八頁。
- (11) 同盟通信社「同盟通信社の機構」(東京:同
 盟通信社、一九四一年一月)四八頁。
- (12) 「漢文欄の廃止に就いて島内四日刊紙の申合」
 一九三七年三月一日の『台湾日日新報』およ
 び一九三七年四月の『台湾時報』に掲載され
 た。
- (13) 李承機「從清治到日治時期的「紙虎」變遷史
 ——將緊張關係訴諸「輿論大衆」的社會文化
 史」、柳書琴・邱貴芬編『後殖民的東亞在地
 化思考——台湾文学場域』収録(台南:国立
 台湾文学館、二〇〇六年四月)二五頁。
- (14) 李承機「日本殖民統治下「台湾人唯一之言論
 機關」的「苦悶」——「日刊」台湾新民報創
 始初期史料解題」、『日刊台湾新民報創始初
 期電子書』収録(台南:国立台湾歴史博物館
 二〇〇八年七月)。
- (15) 中島利郎「日本統治期台湾研究の問題点——
 台湾総督府による漢文禁止と日本統治末期
 の台湾語禁止を例として」、『岐阜聖徳学園大
 学外国語学部中国語学科紀要』第五号、二〇
 〇二年三月。河原功「一九三七年の台湾文
 学・台湾新文学状況」、「翻弄された台湾文
 学」、(東京:研文出版、二〇〇九年所収)。
- (16) 小林躋造「漢文欄の廃止に関する小林総督の
 声明」、初出は『台湾時報』二一〇号、一九
 三七年五月。「詔敕・令旨・諭告・訓達類纂」
 に収録。(台北:台湾総督府、一九四一年)
 七六八—七六九頁。
- (17) 陳培豊は一連の研究のなかで、東アジアの漢
 文文化圏のもとで、中国白話文・台湾話文・
 日本語の混合体「であり」、同時に中国白話
 文・台湾話文・日本語「ではない」植民地
 漢文」という恣意的かつ混合性の度合いの高
 い文体概念が形成されたこと。統治者が台湾
 人独特の文脈に入る事ができなくなったた
 め、植民地の危機を招き、禁止されることにな
 ったと指摘している。「識字・閲読・創作
 和認同——一九三〇年代台湾郷土文学論戰的
 意義」、邱貴芬・柳書琴編『台湾文学與跨文
 化流動』(台北:文建會、二〇〇七年四月)

八三一—一頁。「郷土文学・歴史與歌謡——重層殖民統治下台湾文学註釈釋共同体的建構」『台湾史研究』一八卷四期、二〇一一年一月、一〇九—一六四頁。

(18) 楊雲萍「序」、李猷璋編『台湾小説選』に収録。この重要な漢文小説を収録したアンソロジーは、総督府の検閲を通らなかつたため、正式に発行することはできなかった。

(19) 黄得時「日據時期台湾報紙副刊——一個主編者的回憶」『文訊』二期、一九八五年二月、六十頁。

(20) 「最後の頁」は呉漫沙が切抜き帳の表紙に自らつけたタイトルである。引用文はそこに記されたもので、文の末尾に「呉漫沙、一九三七・四・一、台北にて」とある。この切抜き帳には、漢文欄廃止に関する老徐「最後一課」、黄得時「最後一句」、李元奇「最後六十天」、施鳩堂「最後一粒」(詩)などの文章が

収められている。呉漫沙は刊行日を記入していないが、文脈から判断して一九三七年三月二日から六月三日のものだろう。資料は呉瑩真の提供による。

(21) 柳川浪花前掲「淋しき昭和十二年の本島文芸界」。柳川浪花の生涯は不明。しかし『台湾公論』に掲載された署名記事から推測するに、おそらく新民報社の記者であろうと思われる。また一九三九年二月号の『台湾公論』には、

『高雄新報』の臨時日刊問題を議論する文章が掲載されているが、署名は「屏東。柳川浪花」となっている。「臨時日刊とはこれ如何?」『台湾公論』四卷二号、十頁。

(22) 黄得時前掲「日據時期台湾報紙副刊——一個主編者的回憶」五九頁。

(23) 藤井省三『台湾文学の百年』(東方書店、一九九八年五月)、三一頁。安田敏朗は最新作「かれらの日本語」のなかで、台湾総督府

の統計資料を整理しこの数字を出している。また安田は日本語(国語)理解者を「国語教育体験者」と称してこそ、植民地の教育現場により接近できると主張している。

(24) 黄美娥は「従詩歌到小説——日治初期台湾文学知識新秩序的生成」のなかで漢文小説の近世性について論じており示唆に富む。『当代』二期、二〇〇六年一月、四二—六五頁。

(25) 「山茶花」は文学の通俗化と大衆の消費文化が結合した典型的な例である。小説の連載が引き起こしたブームのために、ある喫茶店は「山茶花」と名を代えたことを『台湾芸術』は伝えている。『台湾芸術』第二号、一九四〇年四月、八九頁。

(26) 龍瑛宗「ひとつの回憶——文運ふたゝび動く」『台湾新民報』一九四〇年一月一日、一三頁。